

---

# 私とガス灯と黒猫のワルツ

イトマ ユウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私とガス灯と黒猫のワルツ

### 【Nコード】

N4662L

### 【作者名】

イトマ ヌウ

### 【あらすじ】

「さあ踊りましょう、お嬢さん」

真つ黒い空間にガス灯が一本。その重々しい金属質の体は自らの灯を受けて怪しく煌めく。周りにはレンガの床が円を描く様に広がり、さらにその向こうにはびつしりと針葉樹林がひしめいていた。どうやら今夜も招待されたいらしい。ぼやけた頭でそう考える。しばらくすると土を踏む音が聞こえてきた。そしてある所からコツコツという音に変わった。後ろを振り返るとそこには燕尾服を着た黒猫が立っていた。その姿は闇に溶けて消えてしまいそうな程だったが、ガス灯の明かりを受けてうつすらと輝いていた。えらく紳士的なその猫は「今晚はお嬢さん」と言つて、大きなシルクハットを胸の前に持つてきて一礼して見せた。「さあ、ワルツを踊りましょう」彼の声を合図にどこからともなくアコーディオンの音。ストリングス、パーカッションと後に続く。溢れ出した音達の手を取り彼はゆらゆらと踊った。それに合わせてガス灯の火が揺れる。彼の軽やかな靴音と三拍子のリズムが耳に響いて心地良い。彼はいつもくるくると回りながら近付いてきてこう言うのだ。「一緒に踊りませんか？お嬢さん」私は真つ白な手袋に包まれた彼の前脚に手を伸ばす。しかし、いつもそれは叶わない。周りの世界がずると崩壊を始め、足場を失った私は真つ黒い空間に真つ逆様に落ちた。

目を開けるとぼやけた視界の向こうで見慣れた天井が私を見下ろしていた。布団と一体化してしまつた体を引き剥がし、ゆつくりと体を起こした。耳の奥で音楽が聴こえる。それは黒猫のワルツ。私はまた夢を見るだろう。彼と踊る為に。

### PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4662/>

---

私とガス灯と黒猫のワルツ

2010年10月13日05時03分発行